

秋田の小さい街で

もう、10数年前のことですが、夫の転勤で2年ほど秋田の北部の街に住んだことがあります。九州で育ち、東京生活のあとで訪れた秋田の冬は、金魚の水槽の上10cmほどが、凍ってしまったり、冷蔵庫のドアにかけておいたタオルが少しの水分で、翌朝、ばりばりに凍っていたり、野菜などは冷蔵庫に入れておかないと、凍ってダメになるなど、想像以上の厳しさでした。しかし滞在中、ちい君、広野君ご兄弟を始め、たくさんのご家族とお友だちになりました。住宅の裏の庭に、雪を積んでミニスキー場を作り、みんなでわいわい遊んだことは、いまだに、いい思い出となっています。お友だちの一人が、こう言ってくれました。

「ずっと秋田に住んでいれば、冬の間は、じっと部屋にこもっているのが普通だけど、東京から遊君が来て、雪を珍しがってくれたおかげで、楽しいなあ」と。

そして忘れられないのが、ちい君/パパです。

長男の初めての幼稚園の運動会の時、次男は、生まれたばかりだったので、ベビーカーに乗せて連れていました。しかし、九州から駆けつけてくれた夫の父も私たちも長男の走る姿を追いかけてついその場を離れてしまい、競技が終わって急いで戻ってみると、なんとちい君/パパが、ゆらゆらりとベビーカーを動かして、あやしてくれていたのです。

二度目の冬を過ごし、ようやく春の気配が近づいた4月、私たち家族は、秋田から次の転勤先である、長野へ発ちました。

数年後に再び訪れたとき、ちい君/ママは、中学生になった広野君の野球のユニホームを洗っていました。食事の時には出されたエビをつまみ上げて、

「これを殻まで食べて、カルシウムをたくさん摂らねばならねえぞ」と自らおいしそうに口に運んでいました。いつも子どものことを見守る優しいすてきな、ママでした。

それからしばらくして、天国に旅立たれたちい君/ママのご冥福を心よりお祈り申し上げます。深い山あいをいくつもいくつも抜けてたどり着く、その街には、いくつもの思い出がぎゅっと詰まっています。



写真のアイスのトッピングは、ミントの葉っぱです。

秋田のお友だちが、ご自分のお庭のスペアミントや、アップルミントなど数株を送ってくれたのが、今では、我が家の庭に元気に根付き、「簡単おしゃべりクッキング」の必須アイテムとなっています。

こびとのくつや

ちいさいころ、絵本で読んだ、「こびとのくつや」の、こびとのくつやになりたいと、ずっと思っていました。

その初めの記憶は、小学校低学年くらいの時、母が、ちょっと席をはずした間に、食卓にある食べ終わったお皿を台所に運んだことのような気がします。

そして、母が、「ああ、ありがとう!」と言ってくれたのがとても嬉しくて、母が席を立つほんのわずかな合間の、お手伝いを楽しみにしていました。

それが、だんだん、自分の夫になり、子どもたちになり、ピアノの方、そして私の回りの方皆さんに、何が喜んでもらえることを、こっそりやって、そしてそのあとの笑顔が見たいために、「こびとのくつや」になりたいと今も思っています。

北風と太陽

長男が、歩き始めたころに、思い出した童話がこれでした。

強く言ってもだめで、やんわり、包み込むような太陽のような優しさが、人の心を動かすんだなと心のどこかにしまってあったその本に対する想いが、ここぞと言わんばかりに、子育て中に何度も頭の中を駆けめぐりました。3人の子育てをしてきて、太陽になれなかった日もあります。そのときの様子は、今でも思い出せるほど自分のなかで苦い記憶となってしまいました。いつも変わらぬ太陽でいるのは、なかなか大変ですが、それでも、自然とその絵本の場面は、思い出されるのです。

杏ジュース

子どもが小さかったときは、実家の母が、庭になった杏で夏休みのお楽しみとしてジュースを作って、私たちを迎えてくれましたが、このごろは、採れた杏を、こちらに送ってくれるようになりました。見よう見まねで作るようになり、初めのうちは、発酵させてしまったこともありました。今は、吉と同量の氷砂糖に、お酢を、糊量の2%程を加えて、発酵を押さえています。3ヶ月ほど経つと、冷たい水で割って、飲めるようになりますが、送ってくれる杏の量が、12~3kgあるため、一年中、おいしく頂いています。

